

み見る事かぎりなし醫師のもとにさしいりてむかひゐたりけんありさまさこそことやうなりけめ物をいふもくゞもりごゑにひゞきてきこえずかゝる事は文にも見えすつたへたるをしへもなしといへば又仁和寺へ歸りて玄たしき者老たる母など枕がみによりゐてなきかなしめどもきくらんともおぼえずかゝるほどに、あるもの、いふやうたとひ耳はなこそきれうすとも命ばかりはなどかいきざらんたゞ力をたて、引給へとて、わらの玄べをまはりにさし入て、かねを隔て、くびもちぎるばかりひきたるに、み、はなかけうげながらぬけにけり、からき命まふけて、ひさしくやみゐたりけり、

〔倭名類聚抄十六鍍器〕四聲字苑云、鍍音富漢語抄云、散賀利、俗用懸釜二字、今案春秋後語似釜而大口、一云小釜也、

〔箋注倭名類聚抄四鍍器〕按懸訓佐賀利、鍍可懸而煮物、故名佐賀利也、用懸釜字、未知所出、廣本注末有今案春秋後語云、懸釜而炊云々、部類器皿部中、別無有此器之名二十七字、按晉樂資春秋後傳三十卷、見隋書唐書、春秋後語蓋是、今無傳本、懸釜而炊、蓋晉智伯攻晉陽、引汾水灌其城、時之事、詳見戰國趙策、史記趙世家、韓非子十過篇、淮南子人間訓、然是謂懸釜於竈上而炊、非別有名懸釜之器、則諸古本無者為勝、略中按說文、鍍釜大口者、玄應音義引說文、作如釜而大口者、玄應又引三蒼云、鍍小釜也、四聲字苑蓋本之、又廣韻、鍍釜而大口、一曰小釜、皆與此所引同、略中按古鍋有施耳於內、懸而煮物者、余嘗見若干口、當是佐加利釜而大口者疑是、但宣和博古圖錄所載鍍大腹窄口、不與說文所言同、

〔東雅十一器用〕鍍サガリ略中サガリとは下也、その下げて懸くべきをいふなり、釜鍍の屬、今も方俗の如く、古の制の如き、猶詳にすべからず、今に依りて云はんに、釜は俗にはハガマといふ物の如く、鍍は茶釜といふ物の如くにして、懸くべき者をいふなるべし、されど釜に似て大口きなる物の如くなるをいふに似たり、